



一つ違う路地を抜ければ、そこは君の知らない世界。

気怠い夏の白昼夢

萌黄色の新緑が影を落とすアスファルトを、僕は一人歩いていた。

木の葉の合間から零れ落ちる日差しが肌を刺す。

腕を額に翳し、僕は空を仰ぎ見る。

今日も晴天。

真夏の空は一年で一番碧く澄んでいる。

歩いているだけで頬を汗が伝うが、それでも蒸し暑い教室で授業を受けているよりかはましだろう。

半袖の襯衣から覗く今はまだ白い肌も、夏が終わるころにはきっと良い色に焼けているだろう。

。

RINN

乾いた鈴の音に振り返ると、黒猫がのんびりと塀の上を歩いて行く。

昼下がりの住宅街は人気がなく、僕はふと友人に出会ったような気持ちになった。

「おいで。」

にっこりと微笑んで手を伸ばしたが、猫は僕を一瞥しただけで、そのまま歩いて行く。

どうも気位の高い猫らしい。

上手に日陰を選んで歩いて行く。

いったい、何処へ行くのだろう。

逃げもしないが媚もしない。

その態度が気に入って、僕はそっと後をつけた。

天鷲絨のような艶やかな毛並みを、太陽が滑り落ちる。

まるで誘うように僕を振り返り、猫は急に駆け出した。

「あ、待って、」

タイ代わりの赤のリボンを揺らし、僕も慌てて走り出す。

十字路を抜け、櫛の大木のある家の前を通り、いつの間にか隣町に出る。

鈴の音だけを残し、猫は細い路地に入った。

こんな所に路地なんてあったのだろうか、

一瞬そう思ったが、この辺りまで来ることは少ない。

きっと気付かなかっただけだろう。

猫の後姿を追い、幾つもの角を曲がり、僕は思わず足を止めた。

見たことのない場所だった。

それほど走ったわけではない。

近くにこんな場所があるなんて知らなかった。

堀のような細い川を挟み、古い町並みが広がっていた。

灰色の鯉がゆったりと川を泳ぐ。

風に揺れる柳。

白壁の土蔵や格子の窓。

古いけれど、趣のある町家だ。

何時か見たような懐かしい風景。

既に猫の姿は見えなくなっている。

...何だろう。

僕はふと足を止めた。

古いだけではなく、この町にはどこか違和感がある。

ひっそりと軒を連ねる店は、薄暗く、通りには人気がない。

CHIRI—N

何処かで風鈴の音が響く。

ああ、音だ。

僕は違和感の正体に気付いた。

この町は静か過ぎるんだ。

川が流れているのに、水の音がしない。

夏を叫ぶ蝉の声も。

どれほど静かな道でも、人が生活している限り、必ず音が聞こえるはずだ。

夢の中にも似た心細い静寂が、僕を不安にさせる。

道の向こうに一軒の駄菓子屋が見える。

格子窓からちらりと人の影が覗いた。

僕は少し安堵して、店に走り寄った。

軒先の氷水を張ったアルミ製の盥に、ラムネが浸けられている。

僕は急に喉が渴いていたことを思い出し、窓から声をかけた。

「すみません、」

「はい。いらっしゃい。」

声から、中の人物が老女であることはわかるが、顔は見えない。

「あの、ラムネが欲しいんですが、」

「五十円だよ。何時も通り、水に沈めておいておくれ。」

尋ねたい事は幾つもあったが止めた。

目の前に人がいるのは確かだが、何故か気配を感じない。

怖いわけではないが、やはり不気味だ。

僕は盥の横に屈む。

光を反射して六色のラムネ壘が輝く。

ラムネと言うと水色だと思っていたが、淡い桃色も綺麗だ。

「おや、珍しい。人の子か。」

ふいに後ろから声がかかる。

振り向くと、飛白の着物姿の少年が立っていた。

年は僕と同じぐらいか。

大きく抜いた首もとから白い項が覗く。

髪に一輪の白い花を挿し、細い竹の鳥かごを手にしている。

中にある黄色い鳥は金糸雀だろうか。

「水色にしておいた方が無難だよ。口に合わないかもしれないからね。」

言って、彼は薄い緑の壘に手を伸ばす。

僕は言われるまま水色の壘を手を取った。

「お金はね、ほらこうして…」

彼は硬貨をぽちんと水に落とす。

盥の底で硬貨がくぐもった音を立てた。

僕もそれを真似る。

「ねえ、君。猫を見なかった、」

「猫、」

少年は少し考え、

「綺羅のことかな、銀の鈴をつけた生意気な猫。」

「そう、」

「あの猫、触らせてくれないだろう、」

彼は心底悔しそうに言う。

「今日は見てないけど、居場所はわかる。おいで、」

すっと僕の手をとり、彼は歩き出す。

きめ細かい肌はひんやりと冷たく、ラムネ壺よりも心地良い。

「ねえ、何故この町はこんなに静かなの、」

「そりゃ皆、夜行性だからさ。」

「夜行性、」

「そう。昼はいいけど、夜はあまり出歩くんじゃないよ。何にだって区切りがあるんだから。」

「区切り...」

「君は運が良い。僕はけっこう親切なんだ。」

少年の云う事は微妙に解らない。

無粋に問いただすのも気が引けるので、僕は適当に相槌を打つ。

「君、昼は一人でいるのかい、」

「大体ね。もちろん眠っている日もあるけど。」

「寂しくない、」

「少しね。」

呉服屋らしき店の軒先に、水の入った丸い玉がいくつも吊られている。

中を泳ぐ赤いものは金魚のようだ。

「金魚玉が珍しいのかい、」

「風流だね。」

「昼に見るから美しいのに、あそこの主人は夜しか出てこないんだよ。」

「もったいない。」

「そうさ。もったいない。」

からからと下駄の音が響く。

相変わらず町に人気はない。

「綺麗な花だね。君の黒髪によく似合う。」

「ああ、これ、」

確かめるように、髪に挿した花に触れ、少年は軽く微笑む。

「沙羅双樹だよ。この辺りじゃあまり見かけないんだけどね。」

「沙羅双樹、」

僕は少し眉を顰める。

「季節が違うよ。沙羅双樹はもう少し前だろう、」

「季節なんて、大して役には立たないさ。花は咲きたい時に咲けば良い。」

形の良い紅い唇を歪め、彼は怪しく微笑む。

「そういうものかな、」

「そういうものさ。」

町は信じられないほどに静かで、下駄と風鈴の音だけが、忘れられたように響いていた。

町家の並びに溶け込むように、小さな寺があった。

二段ほどの石造りの階段を上り、少年は境内に入る。

そこは桔梗の花と小さな地蔵菩薩が共存する、不思議な空間だった。

「ああ。やっぱり此処だ。」

何処からか鈴の音が聞こえる。

でも肝心の猫の姿は見えない。

少年は鳥籠を抱えたまま、木陰の長椅子に腰を下ろし、僕を手招きする。

「貸してごらん、」

SHUUと音がして、ラムネの蓋が開く。

「ありがとう。」

僕は不器用で、いつも服を濡らしてしまう。

彼の気配りが僕には嬉しかった。

「どうだい、一口、」

彼は自分の壺を僕に差し出す。

ほんの少し飲んだだけで、僕は咽る。

「あはは。やっぱり合わないだろう、」

「何、これ、」

舌先がぴりぴりする。

「知らない。でも昔からこういう味だから。」

薄荷水にも似た変わった味だ。

彼は半分程飲んで、蓋を外す。

少し壺を傾けて上手に中のビィ玉だけを取り出し、残りは地蔵の前に置いた。

「虹色ラムネと云うんだよ。壺の色は六色しかないのに。」

「へえ。」

「ここじゃ、そういう事はざらなんだ。何かが少し狂ってる。」

「君も、」

「そう。僕も。」

彼は空を仰ぎ、少し目を細めた。

「雨だ。」

「え、」

手を伸ばすと、温い雫が落ちてくる。

「本当だ。こんなに晴れているのに、」

雲すらあまりない空には、太陽が照っている。

「狐雨だ。直ぐに止むよ。」

少年は、少し考えて、

「そう言えば、隣町の庄屋の娘が嫁に行くと言っていたっけ…」

眩きながら、隣に腰を下ろし、肩を竦めて見せる。

「困ったものさ。噂話にばかり詳しくなる。」

その云い方が妙に年寄り臭くて、僕は思わず笑ってしまった。

「ねえ。光の中で降る雨は何処から落ちるのだろう。」

ふと唐突に尋ねた僕を、少年はまじまじと見つめる。

「知ってどうするのさ、」

「知らないよりは良いだろう、」

「なるほど、違いない。」

POTA—POTA

葉に落ちる雨音に僕たちは少し耳を傾ける。

彼の隣は何故か心地良い。

「僕はね、ラムネが飲みたかった訳じゃないんだ。ただ、ビィ玉が欲しかった。」

「うん、」

手の中で透明の水晶を転がしながら、少年は口を開く。

「普通のビィ玉じゃなくて、ラムネのビィ玉が欲しいんだ。解るかい、」

「うん。」

「兄たちは無意味だと言うけれど、君はどう思う、」

「何故欲しかったの、」

「僕が欲しいと思ったから。それ以上の理由があるかい、」

「素敵だね。」

僕が云うと、彼は満足したように微笑む。

彼の気持ちは良くわかる。

大人はきっと同じビィ玉だと笑うけど、僕たちにとっては大きな問題だ。

「ああ。止んだね。」

少年は光に翳したビィ玉を覗きながら立ち上がった。

何時の間にか、雨は止んでいた。

POTATTと名残惜しげに木の葉が音を立てる。

彼は鳥籠を開き、中の小鳥を外に出す。

震える小鳥を優しく捕まえ、手を開く。

「さあ。お行き。もう捕まるんじゃないよ。」

碧い空に向かって、小鳥は囀りながら舞い上がった。

「良かったのかい、」

僕は彼の肩越しに声をかけた。

「何が、」

「だって君、悲しそうだよ。」

「仕方ない。住む世界が違うのだから。」

「やけに諦めがいいじゃないか。」

「懐きはしないさ。動物は敏感だから。」

彼はくるりと僕を振り返る。

「さて。それじゃあ、もう一人逃がさなくては。」

彼は髪的沙羅双樹をとり、そっと僕の頭に挿す。

僕はひどく君が気に入ってしまったのだけど、」

悪戯っぽく片目をつぶり、

「僕と一緒に来るかい、」

とても魅力的だったけど、僕は迷わず首を振った。

「止めておく。君の事は好きだけど、」

「賢明だ。」

「好きな道を行けばいい。迷うことも悪くない。でも決して道を見失ってはいけないよ。」

彼はそこで、少し眉を顰める。

「いけないな。どうも年をとると愚痴っぽくなる。」

言葉とは反対に、彼の口調は楽しそうだ。

「君は猫を追って来たんだね、」

「うん。」

「なら、呼ばれたわけではないのだから帰してあげよう。」

「呼ばれる、」

「そうさ。この町に呼ばれたものは帰れない。」

少年はくすくすと笑い、妖しく微笑んだ。

「そうでなくとも、夜に人の子が訪れようものなら、逃げるのは無理だと思うよ。」

「何故、」

「子供の肉は美味しいのさ。」

事も無げに彼は答える。

「僕はまだ若いから、そんな気は起こさないのだけど。」

その時、どこかで時計の音が響いた。

体に響く振り子の音。

「ああ、早くお帰り。兄さんたちが起きる前に。」

「でも...」

「ほら。猫ならあそこに。」

彼の指差す先石段に、先ほどの猫がいつの間にか座っている。

「またおいで。もちろん昼間にね。」

「此処はいったい、」

僕の問いに、彼は優しく笑う。

「来たいと思ったら、道は必ず見つかるものさ。」

云いながら、彼は軽く僕の背中を押す。

「ほら、また見失うよ。」

黒猫は僕を振り返り、そのまま駆け出した。

「きっと来るから。」

それだけ告げて、僕も慌てて走り出す。

「待ってるよ。僕の名は炬だ。」

風が吹いた瞬間、彼の頭に二本の白い角が覗いた。

声を掛ける間もなく、少年の姿は掻き消えるように見えなくなる。

ああ。そういう事か。

妙に納得しながら、僕は猫を追いかけた。

KATANN

ラムネ壺の中のビィ玉が音を立て、僕は我に返った。

気付くと僕は、隣町の住宅街に立っていた。

一呼吸置いて、蝉の声が破鐘のように響いて来た。

あれ、おかしいな。

何故こんな所にいるのだろう、

そう思いながら、ラムネ壺に口を浸けた。

少し温い。

弾ける炭酸が、渴いた喉に気持ち良い。

今日も暑いな。

仰ぎ見る空は、目にも鮮やかな碧。

TIRINN

渴いた音に顔を上げると、すました黒猫が僕の前を横切る。

何処に行くのだろう。

僕は再び猫を追う。

ある晴れた日に。

<http://p.booklog.jp/book/26007>

著者 : kadukimai

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/kadukimai/profile>

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/26007>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/26007>